

二十八日楚に入った。

西塾雜詠五首

書劍飄然賦遠遊 兩逢夏曆換冬裘 狂生有常鬼氣 季子無金未返周 簞滴聲收春花禱 書燈

影小夜窓幽 回踵往事都如夢 露語嬌條伴客愁

書劍飄然 遠遊を賦す。兩たび逢う夏曆を冬裘に換うるに、狂生病ありて常に愁を思ひ、季

子金なくして未だ周に返らず。簞滴 声收つて 春花静かに、書灯 影小にして 夜窓幽な

り。踵を回らせば往事は都て夢の如く、露語嬌条 客愁に伴う。

今亦稀邊華講堂 風光最是似柴桑 園因引客開三徑 籬爲看山缺一方 松影當簞溪吐月 泉

聲隔竹簞生涼 欄前思句多時立 螢火如星入綠楊

今亦た稀邊に講堂を築く。風光は最も是れ柴桑に似たり。園は客を引くに因つて三徑を開き、

籬は山を看人が爲に一方を缺く。松影は簞に当り溪は月を吐き、泉声は竹を隔て簞は涼を生

ず。欄前に句を思つて時に立つこと多く、螢火は星の如く緑楊に入る。

花明柳暗媚春晴 此際蕭然三面橙 山似犬牙千嶂出 地如鏡面一川平 遙村小路多牛跡 隔

水荒祠只鳥聲 時有同人来剝啄 燈前相對約詩盟

花明柳暗 春晴に媚ぶ。此の際蕭然 三面橙。山は犬牙に似て千嶂出で。地は鏡面の如く一

川平かなり。村に通ずる小路に牛跡多く、水を隔てて荒祠只だ鳥声。時に同人の来て、剝啄

するあり。灯前に相對して詩盟を約す。

少小裁詩學古賢 千秋模範有開天 清新最愛王摩詰 俊逸還憐李謫仙 一代功名皆覆日 半  
生遊藝面兼禪 遺編論處偏多感 萬籟收聲夜寂然

少小 詩を裁して古賢を學ぶ。千秋の模範 開・天あり。清新最も愛す王摩詰。俊逸還た憐  
れむ李謫仙。一代の功名 雲は日を覆い。半生の遊藝 画は禪を兼ぬ。遺編論する處 偏に  
に感多し。万籟 声收つて 夜寂然。

誰惟人散晝如年 旅況詩愁滅又然 欲寄鄉書無驛犬 復看春事到啼鶯 千村爭引移秧水 數  
里晴浮打麥烟 竹影槐陰庭已暮 半牕初月讀殘書

誰惟 人散じて登は年の如く。旅況詩愁 滅えて又然け。鄉書を寄せんと欲すれども驛犬な  
し。復た春事を看れば啼鶯到る。千村争つて引く秧を移す水。數里晴れて浮かぶ麥を打つ烟。  
竹影槐陰庭已に暮れ。半牕の初月に殘書を讀む。

これらの詩に詠するものが咸宜園の環境であり、そこに學ぶ一書生の心情だ。ここでかれが詩  
の「模範」に開元・天宝すなわち盛唐をあげ、最も愛する詩として王維の清新と李白の俊逸をあ  
げているのが面白い。このふたりに陶淵明を加えたら、子玉の師の淡窓の当時の好尚にほぼ近い  
のだらう。「懐旧樓筆記」二月二十八日。

三松齋壽・蔗谷升・小園亭。酒ヲ携へ來ッテ。新居ヲ賀ス。才田久市亦偶々至リリ。飲宴シテ  
詩ヲ賦ス。予ガ詩ニ曰ハク。

土木方爲崇 風情久作灰 因君携酒至 使我喚詩來 山色窓間畫 灘聲枕上雷 何時堪繫馬

小柳文門裁

土木方ニ崇ヲ爲スモ。風情久シク灰ヲ作セリ。君ガ酒ヲ携工テ至ルニ因リ。我ヲシテ詩ヲ喚  
ビ来ラシム。山色ハ空閑ノ画。響声ハ枕上ノ雷。何時カ馬ヲ繫グニ堪エン。小柳門ヲ夾ニテ  
裁ウ。

末二句は王維「少年行」の「繫馬高樓垂柳辺」に因むであらう。淡窓の「ト居ノ詩」

永山南二里	有村名濠田	茂林互紫帶	流水自潺湲	維崇之丁丑	我始經營焉	屋以白茅葺
籬以枯竹編	籬前種楊柳	屋後種琅玕	園有葵與萱	庭有菊與蘭	室中僅杏膝	蘭疎三四間
上築一小樓	歷歷見南山	西北閑寂處	蒙士所周旋	舊聲穿亂竹	旦夕琅琅然	東是伯父宅
樓隱已多年	竊道二阮迹	與結林下歡	邑民十餘戶	信步亦往還	每時買村酒	相會話團樂
我有烟霞疾	而無名利緣	既卜樂郊居	將寧碩人寬	臨水弄遊魚	望林數歸禽	何以名吾室
請名以考槃						

永山ノ南二里。村アリ濠田ト名ヅク。茂林互ニ紫帶。流水自ラ潺湲。これ歳の丁丑。我始め  
て經營ス。屋ハ白茅ヲ以テ葺キ。籬ハ枯竹ヲ以テ編ム。籬前に楊柳ヲ種工。屋後ニ琅玕ヲ種  
ウ。園ニ葵ト萱トアリ。庭ニ菊ト蘭トアリ。室中僅ニ膝ヲ容ル。蘭疎三四間。上ニ一小樓ヲ  
架シ。歷歷南山ヲ見ル。西北家塾ヲ開キ。蒙士周旋ナル所。舊聲乱竹ヲ穿テ。旦夕琅琅然々  
リ。東ハ是レ伯父ノ宅。樓隱已ニ多年。竊ニ二阮ノ迹ヲ追イ。予ニ結ブ林下ノ歡。邑民十餘  
戸。歩ニ信セテ亦タ往還ス。每時村酒ヲ買イ。相合シテ團樂ヲ話ス。我ニ烟霞ノ疾アリ。而

モ名利ノ縁ナシ。既ニ樂群ノ居ヲトシ。将ニ碩人ノ寛ヲ学バントス。水ニ臨ンテ遊魚ヲ弄シ。林ヲ望ンテ歸鳥ヲ教ウ。何ヲ以テカ吾カ室ニ名ツケン。請ウ名ツクルニ考樂ヲ以テセン。

宛然として陶淵明である。いや、陶淵明を慕う人である。子玉の「西塾雜詠」は淡窓の詩の成った後、これを学んで作ったのかもしれぬ。ことばはかなり自由に駆使されるようになったが、のびあがって風雅の世界をのぞき見る姿がうかがわれる。淡窓の作は、こころとことばとの間に阻礙するものがなく、平生の呼吸が自然にことばとなつてここにある。陶淵明の固窮を賞いて形成された玄微と強勁はここにはない。しかしそれは、内的外的条件のちがいを考慮すれば当然のことである。陶淵明を慕いながら陶淵明の強固を欠いたところに、淡窓の教育者としての留聲が円整し、その学生をそれぞれ賦性に応じて養成しえた契機があるのかもしれぬ。

## 二〇世紀の李賀

(三)

1972.5.18-30

久保天隨

昨年、すなわち一九七一年、草森紳一氏が十月一日消印のはがきで「私が見たいと思いつつまだ見ない文献として、江崎萍「李長吉詩」熊裕芳「李長吉月」辻探一「李長吉を論ず」久保天



随「長爪郎を論ず」致干「没落貴族的詩人」をあげ、氏が復写してもっているものに陳培瑾「李  
 蜀評伝」<sup>三十五頁</sup>（国立広東大学文科学院季刊・民国十四年）がある、と示された。「中国史学论  
 文索引」へ北京・科学出版社、一九五七年）によれば、江氏の「大文壇」一巻2期（一九三二  
 年二月）、熊氏の「学灯」一九二四年三月三十日―四月二日、致氏のは「文学杂志（北平）」一  
 期（一九三三年四月）にのったもので、わたしもまた見得ないでいる。ついでに同じ索引に著録  
 する李襲文献を、年次を追って挙げる。田北湖「昌谷別伝并注」これについてはすでに述べた。  
 周閑風「詩人李長吉之詩」（「学灯」一九二四年七月二十九日）これはたぶん同氏の「詩人李襲」  
 （国学小叢書、商務印書館、一九三六年六月）にその趣旨が含まれるだろう。万曼「詩人李長吉」  
 （「文学週報」5期、一九二八年）。王礼錫「瞻背詩人李長吉」（「文学週報」7巻23期、一九二  
 九年）これは同氏の「李長吉評伝」（物観文学史叢稿之一、上海・神州国光社、一九三一年）に  
 含まれるだろう。李嘉言「為長吉生的考証」王礼錫君」（「文学月刊」3巻1号、一九三二年五  
 月）。洪為法「李襲之死」（「青年界」5巻2号、一九三四年二月）。朱自清「李襲年譜」（「清華  
 學報」10巻4期、一九三五年十月）。「李襲年譜補記」（同誌11巻1号、一九三六年一月）。  
 さて、草森氏は十一月二十六日清印のはがきで、八久保天隱の「長爪郎を論ず」は、明治三十  
 三年の八月号から十月号にかけて「帝國文学」に発表されたものであるらしいようです。天隨が  
 東大を卒業した翌年の作で、二十六才の時のものです。…∨と示された。  
 「長爪郎を論ず」を、さきもいったように、わたしは見えていない。明治三十三年は一九〇〇年

で十九世紀最後の年。二つの条件からして「二〇世紀の李賀」でとりあげることにはできぬ。ここにとりあげるのは、文学士久保得二述「支那文学史」(早稲田大学出版部蔵版)での守弱についての記述である。わたしのもっているのは遠藤隆吉「東洋倫理学」と合冊製本し、ともに奥付がないので刊行年月はわからない。ただ、久保の記述が科擧の廃止にふれている。それは一九〇五年の事件だから、この本がそれ以後に執筆されたことはたしかである。

へ李賀字は長吉、系は鄭王の後より出づ。七歳辭章を能くす。愈皇南溪とはじめ聞いて信せず。その家を過ぎて、詩を賦せしむ。筆を操って軌ち成り、自ら目して高軒過といふ。二人大いに驚く。これより大に名あり。賀旦日ごとに出で、弱馬に騎し、小奚奴を従へ、古錦囊を背にし。得るころは、書して囊中に収じ、暮に及び、足して之を成し、率わ以て常となす。後進士に擧げられて名あり。時人、その父名を晋肅といふを以て、擧げらるべからずといふ。愈困つて、諱辨を作る。すでにして、仕へて協律郎となり、卒するとき、年二十七。賀は鬼才を以て稱せられ、その詩、奇詠を尚じ、匪徑を絶去し、當時能く效ふものなく、樂府數十篇、雲韶詰工、皆之を絃管に合すといふ。韓愈曰く、雲烟綿聯、その態を爲すに足らざるなり。水の遶迴、その情を爲すに足らざるなり。春の盎盎、その和を爲すに足らざるなり。秋の明潔、その格を爲すに足らざるなり。風櫛陣馬、その勢を爲すに足らざるなり。瓦棺篆鼎、その古を爲すに足らざるなり。時花美女、その色を爲すに足らざるなり。荒園廢殿、椽瓦邱隴、その怨恨悲愁を爲すに足らざるなり。飯吸蠶牛、鬼蛇神、その虚怪荒誕を爲すに足らざるなり。と、長吉の詩、變化かくの如く、鬼趣はその獨闢に係ると雖も、いたすらに字面に刻意し、なほ其神を窮めざるや、拘牽殊に甚しく、未だ其妙を完うするに及ばず。李憑笠

篠引権門太守行金銅仙人辭漫歌將進酒美人梳頭歌の如き、集中の傑作にして、ともに、鬼亦却つて少し。

（支那文學史下 第三期 第一 唐代文學 一三 蕪愈の詩及び其門下）

杜牧の「李賀歌詩集序」李商隱の「李賀小伝」などの記事を結びあわせて最後にかれ自身の（たろう）評語を加えて、まとめている。秀才の模範答案という感じがする。

神田喜一郎氏によれば「久保天隨」ハセム、一九三〇 漢詩人。本名は得二。長野県高遠の出

身。一八九九年（明治三二）東京帝國大學漢学科卒業。前半生は評論・紀行、隨筆などに筆をふるい、主として文壇に活躍した。また多くの漢籍の啓蒙的な注釈書を書いた。後半生は、漢詩の専門家として名をはせ、秋碧吟壺詩鈔（しゅうへきぎんろししゅう）など数種の漢詩集を刊行した。その作品は清朝の吳梅村を学んだもので、詞藻（しそう）富麗である。晩年台北帝國大學教授となり、西箱記（せいそうき）の研究をもつて文學博士の学位を授けられた（『世界大百科事典』平凡社、一九六五年）

「啓蒙的」ということばは、たぶん、久保の文學史を概括することばとしても最も適切だろう。わたしが手さぐりで中國文學のなかにはいつてけきつあつた少年時代に、この文學史からいろいろ教へてもらった。まさに啓蒙してもらつたわけで、だから「啓蒙的」ということばで、この本をおとしめる気持は毫もない。ただ、ふしぎに思うのは、中國の清末民初のいわゆる啓蒙思想家の啓蒙的著作が、読者を感じ動鼓舞するものが多いのに、日本の明治・大正の啓蒙書でわたしの読んだものが、ほとんど一律に、便利でありながら退屈なことである。わたしのせまい見聞を一



般化するとはすまい。久保は「長爪郎を論ず」の後にこの文学史を書いたはずである。文学史の李賀についての記述は「長爪郎を論ず」の要約的性質をもつといえないか。

さて久保の記述のうちで、かれ自身の意見と考えられるのは「長吉の詩変化かくの如く」以下の数行であるへひとつとすると、これもどこかの詩話かなにかにあった評語かもしれぬが。そこでかれの長吉の「鬼趣」についての理解は、李賀についての因襲的な漠然とした評判から一歩も出ていない。「李憑空篋引」ないし「美人梳頭歌」が標中の傑作であるというのはいい。それらに「鬼趣」が少いというのもしまあいい。しかし「却つて」というとき、「鬼趣」と「傑作」とは反対の方向に阻隔される。はたしてそれでよいのか。もしそうならば、鬼趣は苦気のアヤまちで、そのアヤまちを矯正することによって傑作が成立した、ということになりそうだが、はたしてそうか。賀の詩のいわゆる鬼趣なるものも、評家によって、さまざまにされる。そこをある程度はつきりさせないと、論議がいつこうに噛み合わせることになる。詩話のたぐいを読んで、いつもどこかしく思うのは、ことばが同じ次元で使われていない場合が多いからだ。久保のことばは、もしつぎのような意味でいわれたものだとするなら、わたしはな、とくする。すなわち、李賀の詩にしばしば表現される怪奇は、かれの表現の目標だったのではなく、かれの分析した現実世界の構造の怪奇が結果として作品に反映してしまった。しかしかれの目ざす世界は、そういう怪奇さのすくない方向にあり、その夢想がかれの作品に流露したとき、かれの作品は傑作となった。

だが、久保のあの文章がこのような意味をこめて書かれたものとは、わたしには信ぜられぬ。



久保の文学史のいいところは、清朝の文壇の世論のようなもの、一種の平均的判断を示してくれたところにある、といえようか。李賀を專論したことのある詩人の李賀論としては物足りない。しかし、ひとびとが李賀をどんな目でみているかということ、この短い文章の中にほとんど尽されている。それは文学史家の作業としては、一種の成功だと、いえなくはない。二〇世紀は、そこから、出発しなければならぬのだ。

斎藤 暁 (その一)

一九二〇年前後に斎藤「李長吉の象徴主義的傾向」が発表されたらしい。わたしは読んでいないが、本人と、その友人がいつている。(斎藤は「漢詩大系・李賀」を書いていたので、のちにもう一度かかればなうめ)この論についての本人のことばは「漢詩大系・李賀」の序に、友人のことばは、同じ書の月報にの、た浅野晃「思い出」である。いずれも一九六七年九月刊。

斎藤の序の前半を写す。

父の書齋から王琦(わかし)象解李長吉歌詩一帙をとり出して読んだのは、中学の二三年の頃だ。たと思ふ。それ以来、これを手放すことができなくなった。私は小学時代、唐詩選・三休詩・聯珠詩格などを与えられて詩の世界に入ったが、中学時代には唐詩正音・唐宋詩醇などの選集・陶淵明・王维・孟浩然(もうこうぜん)・韋应物(わいおうぶつ)・柳宗元・元稹山・高青邱などの家集を左右に置いていた。しかし李賀へ

長吉はその字にはそれらと違っていた。明治・大正の新しい詩の運動は西欧の詩の論議や模倣によつて田舎の少年の私にも影響を与えていた。中学の上級生のとき、たまたまマーサー・シモンズの「ディエフにて、日没後」を知ったときは一つの驚異であった。……それらはすべて李賀の詩境に対する理解を深めてくれるような気がした。第三高等学校に入り、京都に移ってから……ポードレールの「悪の華」を読んだときの強烈な印象も忘れることができない。ウエルレーヌやウエルアーランなどを覗き、ドイツ語では、あまり人の読まないフェリックス・デールマンの「感覚」(Sensationen)と「神経系」(Neurotika)に心惹かれた。そのころ友人に乞われるままに、三高の機関誌「漱水会雑誌」に「李長吉の象徴主義的傾向」について一文を寄せた。それがドイツ語の先生でクラス担任だった成瀬清教授へ無極先生、のちの京都大学教授の目にとまった。先生はそれを京都大学の狩野直喜教授(君山先生)に見せたらしい。成瀬先生は私を招いて「狩野さんに君のことを話したら、そういう学生はわしのところに入學するようにすすめてくれと言われた」と、まるで鬼の首でもとったようないきおいこんだお話ぶりだった。私は感激したが、そのすすめには当惑した。「漢学は私の父祖以来の家学なので、今後どうやって研究してゆけばいいか、すこしは見当がつくような気がしますが、いわゆる洋学には全然見当がつかないので、これから勉強したいと思つていたので」と言つたら、成瀬は「うん、そうか」と言われたきりだった。私のその文章は、今から考えると幼稚きわまるもので、問題にするようなものではなかった。しかし、あれから三十六、七年も経過して(一九五六年、今からざつと十年前に)アメリカのバ

クスター (Glen W. Baxter) が「轉愈とほとんど同じ時代に、等しく独創的だったのは短命の人李賀である。彼の奇異な、悪魔な詩は、フランスの象徴主義者たちのそれに比較されてきた」と言っているのを「エンサイクロペディア・ブリタニカ」新版の「中国文学」の項で発見したとき、多少の感慨なきあたわずであった。……V

浅野の文を抄出する。

△そのときの雑誌(憲雄注、漱水会雑誌)に載って見たもので、わたくしに強い印象を与へた作品が二つあった。ひとつは日野草城の俳句であった。……それよりさらに感心した作品があった。それが响氏の評論であった。表題は「李長吉の象徴的傾向」といふのであったと記憶する。斎藤岫という名前も始めてだし、李長吉という名前も始めてであった。李賀は唐詩邊にのってゐない詩人である。しかし白居易にしても、杜牧にしても、唐詩邊からはみ出てゐるが、わたくしらはよく知つてゐたし、その二三の作品には親しんでゐた。李賀だけは知らなかつたのである。……いづれにせよ李賀は、李白や杜甫や王维のやうに周知の名前でなかつたばかりか、おそらくは異端の鬼才として、疎外されてゐたことが多かつたのであらう。响氏の論文は、李賀の詩を引きながら、そのいけりる象徴的特徴を、綿密に説明したものであった。どのやうなことが書いてあったのかは、まったく忘れてしまつたが、原詩の二三を近代詩風に直したものが、いかにもよく出来てゐて、感嘆すしくしたことを覚えてゐる。しかし、それ以上にわたくしを感心させたのは、象徴ということについての体験的に深い考察であつた。……V

ここにいう無詩を近代詩風に直したものが、どんなものかは知らぬが、斎藤の「青春詩集」(愛  
宕書房刊、昭和二十一年六月)に「新竹に題することば」があり「李長吉が昌谷新筍の絶句を讀  
みて」と注する。作時は大正五年三月から七月の間らしい。へうすら青き光なす新竹の幹、はだ  
そぎてノ秘めにけるわがうた、そのうへにそと書きみむノ肌はだの香、風かぜつややく、白しろき粉こな輕かろうこぼ  
れちる。ノ寫しゆくわが文字、くろぐると浮く墨色すみノつれづれなる縁言えんごも、恨多うらみかる一節ひとせきもノう  
すあをき幹のへ、人知れずぞ消えけく、ノかくていつかけるばると空そらけここにも覆おほれゆけばノお  
とろおどろが下の路絶みち之夢も跡なし。ノ雲くもおもたく宿りてよ、狹霧せまきは咽なみひ啼なくけけひ、ノ枝えだ、千  
萬ちぢに交まじひて、いく重かさ深ふかき林はやしなり。V この七、八行を除き、九行の「露」を「したたる露」とし  
て「漢詩大系李賀」の「昌谷北園新筍四首」其一の訳としている。

斎藤响は明治三十一年一月十五日生。東京帝國大学文学部哲学科卒。東洋大学・大東文化学院  
明治大学の教授を歴任。文学博士・法学博士。

録 雪林 (付録 謝佐馬)

「李長吉的詩」がある。上海羣衆圖書会社が民國十六年(一九二七)に発行した「文哲季刊」<sup>十月</sup>  
第一期の二五―三五ページに掲載された。日本の昭和二年である。

斎藤がボードレールなど西洋の詩人を引き合いに出したが、蘇もまたこれに劣らぬ。題の次に



マイクトル・ユゴーの詩句をひく。誤植があるが、そのまま写す。 < Ils comprennent ma voix sur le monde (epanchee) / Mieux que Vous, O vivants bruyants et querelleurs! / Les hymnes de la lyre en man ame Cachee, / Pour vous ce sont des chants, pour eux ce sont des (pleurs) > Victo Hugo. > (我、フレンスの象徴派詩人魏倫著 Tadis et Nagriere (憲注・ヤルレーヌの『昔と今』)の『心』がこれらの詩。一篇も生命ならざるはなし)の語めつ。ボードレールの感覚は病的だといわれ、その人は詩界の悪魔とみとめられているが、中国詩界の鬼が李賀であって、その情緒は凄艶悲涼。「オ鬼」と名づけるべきだ、という。アルフレッド・ティソンの「The lady of Shalott」を讀むと賀の「十二月宮詞正月」の「錦牀睡臥玉肌冷霜臉未開對朝暝」の西句と共に、睡れる美人を写したのではなく「艶屍」を写したもののようには感ぜられる、という。また、カーライルの病身がその作品を病的にしたように李賀詩の凄苦の音もその身体の疾病による、という。そうして Olive Schreiner の「美術家の神祕」にいう自らの鮮血によって永遠の絵をかいた画家に「心肝を吐出」した李賀をたぐえる。

蘇雪林は、名は梅、雪林はその寺で、筆名は綽漪。安徽省太平の人。フランスのリヨン大学を卒業し、上海の滬江大学、蘇州の東呉大学、安徽大学で国文(中国文学)を講じ、「李義山戀愛事跡考」などの研究「綠天」などの小説がある。フランスで学んだ人が、フランスの詩人と母国の詩人をたぐえるのは不思議ではない。また、東西詩人を比較することは女士以前にもあった。たとえば蘇曼殊(一八八四—一九一八)が「斷鴻零雁記」に「シェリーは中国の李賀のような鬼才

だ」(室糸猶中土李賀、鬼才也。…)というのがそれだ。ただ、シェリーは中国の李賀のようだ、  
というのと、李賀は英国のシェリーのようだ、というのとは、似てはいても違い、言う人がどち  
らも中国人で、言う相手も中国人だとすると、似た言い方の本質的な差異はたいへん大きいだろ  
うと、わたしは思う。しかし、当時は、そんなことは深く顧慮されずに、一種の流行として東西  
文人の作品の表面的な類似がしきりにとりあげられたようである。(いまの日本にもその風潮が  
残ってないわけではない)。女士は一九三四年に出した『唐詩概論』に『唯美文学啓示者  
李賀』を論じている。キヤッチフレーズとして面白いが、その面白いキヤッチフレーズがどれ  
だけ李賀詩の骨髄にふれているか。

『秦王飲酒歌』の『義和敵日玻璃壁』について、これは『法苑珠林依世経』に日天の宮殿が  
金と玻璃から成るといふ記事があり、中国では古くから、義和は太陽の車の御者だとする考文が  
あるので、二つの観念を連結銕録した『思幽語怪の詩』だという。また『帝子歌』の『涼風雁啼天  
在水』の句について、水中に倒影した天をうた、たところが『非常の刻削語』だという。李賀詩  
の重要なところに觸れているのだが、実はこの二つとも清の王琦が注の中でさりげなく指摘して  
いることである。

『咏懐』の『長卿懐茂陵、絲華垂石井、彈琴看文君、春風吹鬢影、梁王與武帝、棄之如斷梗、惟留一頰書、金  
泥泰山頂』について『当時の事情を敘べないだけではなく、自己の議論をあらわさず、替嘆の気  
持し出さぬ。……ただ長卿が家で琴をひくとき、そばで聴いている文君を想像する、春風がかす

かにその鬢影を吹く。この一刹那の印象は、十分深刻、十分感動的で、極めて経済的な手帳で彼女を描出している。千年の古の読者に、長卿のガランとした部屋に、一枝の遠山の芙蓉が語りかけるような感じをおぼえさせる。……』というのは、西洋の美学で訓練され、高蹈派の詩法を学んだ目が見出した。賀の詩の美点であろうか。

「長吉はよく鬼詩をつくるので、人詩をつくっていても、時として知らぬまに鬼気が流露する。たとえは河南府試十二月楽詞の九月に『離宮散螢天似水、竹黃池冷芙蓉死、月綴金鋪光脉脉、涼苑空澹白……』』という。これは空中の夜景を寫したものだ。が、しかしもう鬼境になつてしまつて、夜生吟の如き『西風羅幕生翠波、錦華芙蓉墜青蛾……爲君起唱長相思、簾外露華皆倒飛……』これけひとりの美人が恋人をまちのぞんでも来ない心境をうたう。『西風羅幕』の句け極めて豊饒だが、『忽看綰霜倒飛』は、鬼氣しんしん、かみの毛がよだち、ぞつとする光景だ。このような印象は、女士はそうとはいっていないが、ボードレールやボオの詩からえた印象を、賀の詩から得たものに重ね合わせたものではないか。『ぞつとする光景』と訳した原文は『大慈風景』、だがこれは日本語の殺風景とはちがって、ほめる方向で使っているのである。それならば伝統的な批評家たちが『妖怪』とか『鬼魅世界』とかいってくさした要素を、積極的な価値として見直していることになる。『簾外露華』の句を、わたしは女士のようにには読んでこなかった。しかしこの女を幽塚の人とみれば女士のとりかたけ面白く、この詩はそう読めるところがないわけではない。ただ、『十二月樂詞・正月』の『玉肌・露暎』を驚死というのはどうだろう。そうと、